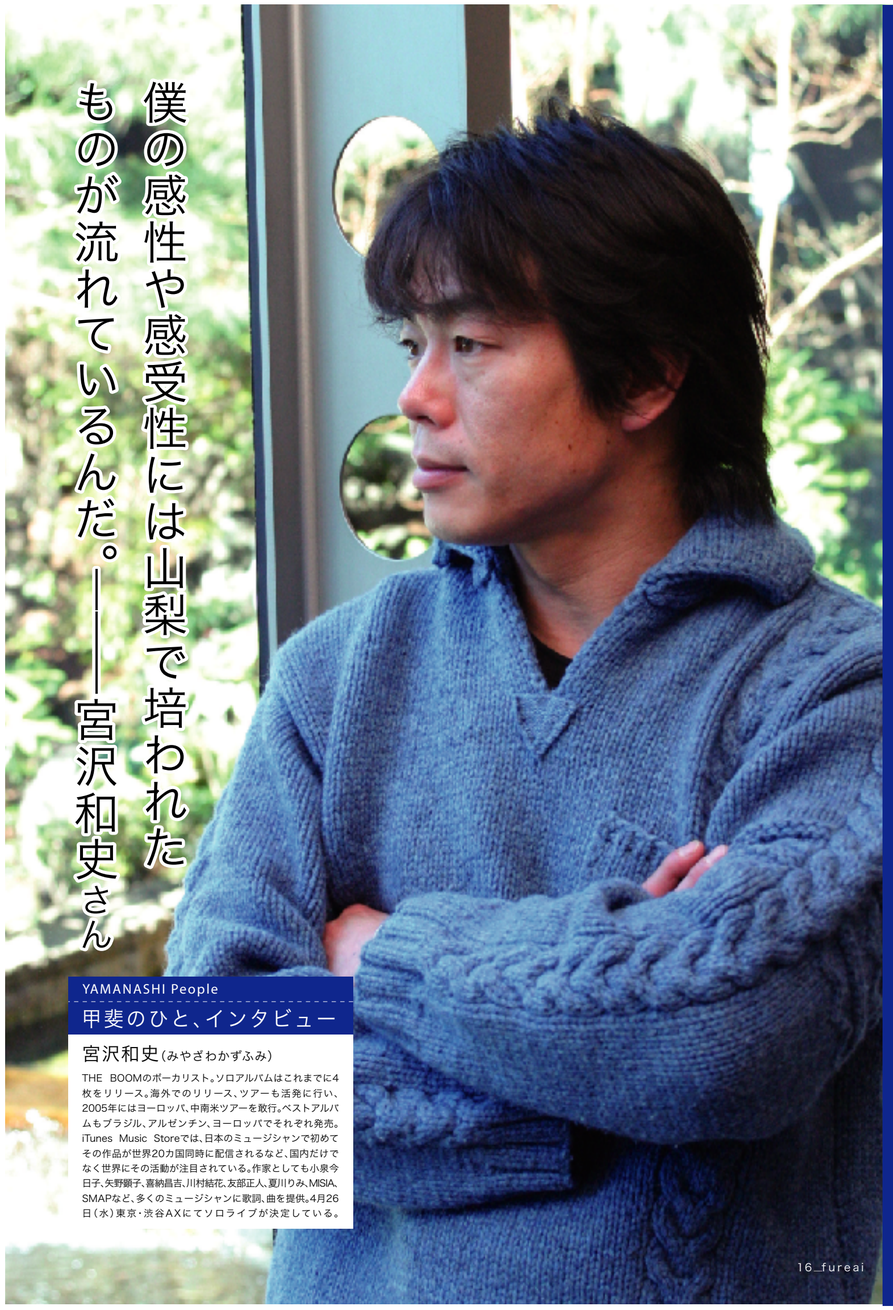
僕の感性や感受性には山梨で培われたものが流れているんだ。——宮沢和史さん



YAMANASHI People

甲斐のひと、インタビュー

宮沢和史（みやざわかずふみ）

THE BOOMのボーカリスト。ソロアルバムはこれまでに4枚をリリース。海外でのリリース、ツアーも活発に行い、2005年にはヨーロッパ、中南米ツアーを敢行。ベストアルバムもブラジル、アルゼンチン、ヨーロッパでそれぞれ発売。iTunes Music Storeでは、日本のミュージシャンで初めてその作品が世界20カ国同時に配信されるなど、国内だけでなく世界にその活動が注目されている。作家としても小泉今日子、矢野顕子、喜納昌吉、川村結花、友部正人、夏川りみ、MISIA、SMAPなど、多くのミュージシャンに歌詞、曲を提供。4月26日（水）東京・渋谷AXにてソロライブが決定している。

世界的な大ヒット曲「島唄」を歌うTHE BOOMは今年でデビュー十七年目を迎える。その作詞作曲を担当し、ボーカルを務める宮沢和史さん。

もともと引っ込み思案で、一人でこつこつやっていたいタイプという宮沢さん。小学校高学年でギターを買い、バンドのまねごとをしていた。「成績がいいわけでもないし、体も強くないし、自分自身にコンプレックスを感じていた」そんな気持ちを曲にして、弾き語りで叫ぶことが本格的に音楽を始めたきっかけだった。

甲府市立北中学校から県立甲府南高等学校へ進学。高校時代は仲間とバンドを組み、ライブ演奏で学園祭にも参加をした。地元ラジオ局の公開生放送に出演し、初めてのオリジナル曲を披露したこともある。バンド一色だった高校時代から漠然とプロになりたいと思っていたが、曲にも歌にも自信がなく、両親にもなかなか理解してもらえなかった。しかしプロになりたい気持ちを抑えきれずに、大学受験を機に上京した。

大学一年生の時に、同じ山梨出身のメンバーや東京で出会った仲間と共にTHE BOOMを結成。バンド名は言葉の響きが気に入ったのと、変わり続ける世の中の価値観や流行に流されないよう、あえて逆説的に付けられた。

ストリートライブを続けていた大学時代、ある土曜日の一限目の授業中。『虹が出たなら』の歌詞を思いつき、書き上げた。それが曲になったとき、自分のオリジナルに確信が持てた」。その後レコード会社のオーディションで優勝。大学四年生の時にプロデビューが決まった。デビューまでを振り返り、次のように語ってくれた。「山梨という限られた情報の中だからこそ、いろんなことを濃いエスプレッソみたいに吸収していた。情報にどん欲だったし、音楽をやりたいという高いモチベーションがプロを目指させた。もし情報があふれていて、それらをリアルに感じる大都会で生まれ育っていたら、プロになろうとは思わなかったかもしれない。自分の中には何もなくて空っぽだった。だからこそ自分の目で見て、触れてみないと信用できなかったし、いろんなことも吸収できたのかもしれない。」

KAZUFUMI MIYAZAWA

ここ数年はヨーロッパ、中南米の国々でも歌っている。最近では「ほっとけない世界のまずしさキャンペーン」への参加など、活動分野はますます広がっている。「いま世界や地球が抱える問題はたくさんある。それを見て見ぬふりするのでなく、僕は音楽で想いを伝えていきたい。歌詞のひと言でも心に残るなら、いつかは僕の想いが伝わるにちがいない」

その想いは昨年手掛けた、甲府市立舞鶴小学校の校歌にも込められているという。

家族ができて山梨に帰る回数も増えたという宮沢さん。一昨年には中学時代の同級生が宮沢さんのスケジュールに合わせて、クラス会を開いてくれた。そこで久しぶりに級友との再会も果たしたそうだ。

「仕事柄、出会いの数は多いけれど、子どものころのつながりにはかなわない。そういう関係をいまから作ろうと思っても無理ですよね。僕が過ごした山梨には自然があふれ、河原でヤマメを捕まえたりした。いま思うと、何にも代え難い幸せだった。いろんなものを見れば見るほど山梨が愛おしく、郷愁を感じる。移り変わりの激しい世の中だけど、その自然や風土は変わらずに残って欲しい。僕の感性や感受性には山梨で培われたものが流れているんだ」「山梨が愛おしい」さらりと発せられたその言葉がとても印象的だった。